第3348号　（第3種郵便物認可）

教育新聞

週2回 月・木発行
発行所 教育新聞社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-40
代表 ☎ 03(3295)7051
〔購読申し込み・お問い合わせ〕
http://www.kyobun.co.jp/
〔購読料・月額〕2,500円＋税
©教育新聞社 2015

子どもの多様な見方を生かす社会科授業

第12回

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師
多賀 譲治

進む教師のみ人を教うる権利あり

太平洋戦争史上最も過酷といわれたガダルカナル島の元帰還兵から、手記を託されたことがある。戦争の過ちや悲惨さを伝えることは近現代史の大きな要点であるが、映像や本から得られる知識は、いわば「又聞き」。細かい字でびっしりと書かれたノートの重みは、指導書や教科書に書かれた戦争記述の比ではない。

私はそのびっしりと書き込まれたノートの細かな文字を子どもたちに見せ、抜粋した箇所を読んで聞かせた。無謀な作戦計画と食糧の欠乏、米軍との圧倒的な兵力・火力の差で亡霊のようにジャングルをさまよった兵士の言葉に、教室はシンと静まり、子どもたちは耳を澄ませていた。島での出来事は、余分な修飾を省き淡々と書かれており、その分、直に凄惨さが伝わってくる。戦争の原因と過程、そして、その結果を知ることは重要だが、戦の中に身を置いた者からの声は、現実感ということでは比べようもなく重い。

この連載の主題は「子どもの多様な見方を生かす」であるが、全ての回で私は、教師自身の姿勢や視点について教材研究という観点で触れてきた。子どもは好奇心の塊であり、もともと多様な見方を持っている。大事なのはそれを引き出す教師のたゆまぬ教材研究と情熱である。

子どもが何を知りたがっているのか、授業をどのように展開すればよいか……。その答えを私は「教師自身の実体験」を積み重ねることだと反復して述べてきた。教材に対する鋭敏な感覚と授業のセンスは、自ら体験することによって磨かれるものだと私は確信している。

当然ながら、私たちは過去に生きているわけではなく、ガダルカナル島の戦いも経験していない。しかし、資料に触れ、あるいはその場に立って、そこに内包されている重要な意味を見逃さないという目と心を養うことはできる。本の字面だけで得た知識では知識の受け売りにしかならず、そうした頭でっかちでは子どもの求めるもの、子どもの見方を生かすことはできないのである。

ご存知のように、大学センター試験の在り方が大きく変わる。中教審は「暗記した知識の量ではなく、思考や判断など知識の活用力を問う」とし、今の小学校6年生が高校3年生になる平成32年度からの実施と決まった。教師自身の思考力と判断力が試される時が来たともいえよう。

さらに付け加えるなら、これまでのような授業観や手法では、学習目標に到達できないということである。しかし、これは、子どもたちの多様なモノの見方を生かし、目を輝かせるような質の高い授業を創り出していく好機ともいえる。教えこむことと考えさせることをより一層明確にし、「考え・判断する」力を子どもたちに育むという社会科の大目標を達成するために。

最後に、私は「進みつつある教師のみ人を教うる権利あり」というドイツの教育家ディースステルヴェークの言葉でこの連載を終えようと思う。1年間に及ぶ連載が少しでも若き教師たちのお役にたてたならば、これ以上の喜びはない。

（おわり）